http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.435　18/11/01

世界三大マンガ文化圏

マンガと聞くと、どんなイメージを思い浮かべるだろう。最近は「クール・ジャパン」戦略の一翼を担う主要コンテンツともなっているが、明治大学国際日本学部教授の藤本由香里先生に、海外のマンガ事情を紹介してもらおう。(「學士會会報」No931より)

＊

ときどき誤解している人がいるのだが、独特な発展をとげた〈日本マンガ〉はともかく、広い意味でのマンガ、すなわちコマと絵と吹き出しの連続で物語を紡いでゆくコミック形式は、けっして日本の専売特許ではないし、日本で発明されたものでもない。

現在私たちが「マンガ」と認識している近代の物語マンガの形式は、欧米で発明されて日本にもたらされたものである。

この連続する絵とコマで物語を語っていく形式はまずヨーロッパで生まれ、それがアメリカを経て日本にもたらされたものだと思われるが、基本的形式は共通していても、その後の発達はそれぞれの文化圏で違っていた。

学生にはよく言うのだが、世界には三大マンガ文化圏というのがあって、一つはアメコミ、もう一つが日本を中心とするアジアのマンガ、そして三つめがフランスとベルギーを中心とするヨーロッパのマンガ、すなわちバンドデシネ、略してＢＤである。この三つは、出版形式（本の形）から版面の構成のしかた、流通のあり方、ビジネスモデルまでそれぞれに違う。

例えばアメコミは、オールカラーで「コミックブック」と呼ばれる薄いパンフレットのような冊子形式が基本。作品は出版社主導の完全分業制で作られ、著作権は基本的に作家でなく出版社にある。だからこそ複数のヒーローの競演も可能だし、アメリカの二大コミック出版社、ＤＣとマーベルがそれぞれワーナーとディズニーに買収されてから、映画でのスーパーヒーロー共演の機会はますます増えている印象がある。　（…なるほど！）

一方でヨーロッパのバンドデシネ＝ＢＤの「アルバム」と呼ばれる基本的な本の形は、大型でハードカバー＆オールカラーの、まるで絵本のような形式。ＢＤの古典的名作であるエルジェの「タンタン」シリーズは、日本では福音館の絵本として出版されている。

もっとも「タンタン」はヨーロッパでも子ども向けのシリーズで、フランス語圏にはメビウスやスクイテン、エンキ・ビラルなど大人向けの芸術的なＢＤがたくさんあり、同じオールカラーでも比較的アップの多いアメコミに比べると、奥行きのある風景描写に力を入れ、コマの中にもう一つ別の「空間」を作りだそうとする傾向がある。数年前からルーブル美術館がバンドデシネと提携した展覧会を試み、それが日本でも「ルーブルNo.9」展（フランスではＤＢは「第９の芸術」と呼ばれる）として巡回展示されたことを指摘すれば、フランスにおけるコミックの位置づけがわかるだろう。

アメコミが、もともと子供のためのコミックと思われていたものが変化し、コレクターやマニア層の支持を得て、愛好家のものとして発展していったのに対して、フランス語圏のコミックの読者はもう少し幅広く、それこそ老いも若きも、クリスマスプレゼントとしてバンドデシネ作品を贈りあっている。